

第九十九回 平成二十一年三月二十一日

慈雲尊者筆 行住坐臥常尔一心(爾)



行住坐臥とは、行く・とどまる・坐る・臥すの四威儀(儀は姿)を云い、常尔一心とは、道を思う気持ちを変えないことを云う。続いてお経の文句に「念伏諸蓋」とある。蓋はおおうことで煩惱のこと。又論語(顔淵篇)に「視聽言動 礼を離れず」と教えた言葉がある。

貝原益軒は、自分の一生の心境を簡単にあらわして「読書独楽 恭黙思道」とも言っているが、恭黙は常尔一心に通じるとも言える。

柳里恭 (柳沢淇園) 筆「窓中只是月」

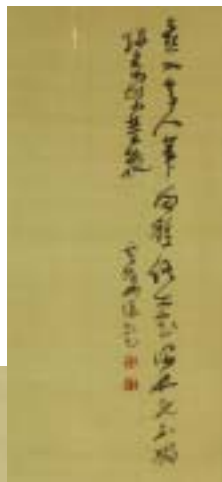


踏花同惜少年春
背燭共憐深夜月

(和漢朗詠集)

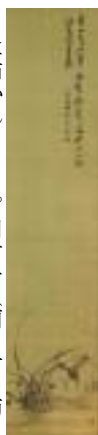
友人と落花を踏みながら共に青春の時を惜しむ。
ともしびを後ろに遠ざけて室中にさしこむ深夜の月光をしみじみと味う。

雲華上人筆 水墨蘭石図



喜入高人筆
嫌移俗士家
深林元不媚
緑葉紫莖花

高人は風流心のある人。筆に入るとは描かれること。四君子(蘭・竹・菊・梅)の中でも蘭は王者の香を放ち最も気品の高いものと尊重される。



雲華上人は書にも画にも優れた本願寺の僧で、中でも蘭の絵を得意とされた。



煖華筆 夢殿

筆者は昭和三十年頃、法隆寺壁画の模写や修理にも携った日本画家の一人。
法隆寺境内の東に在る夢殿には本尊救世観音が安置されている。
画中の桜は、枝垂彼岸桜である。

「藤樹先生の和歌私新抄」をテキストにして学ぶ。

「楠」特集号複製本発刊。

「楠」に紹介されている「世事要言」の言葉を抄出（三六頁〜四六頁）。

・時かぬ種ははへぬ。

・假令ひ百劫を経とも、所作の業亡びず、因縁會遇の時、果報還た自から受く。

・蟹は甲に似たる穴をほり、人は心程の世をすこす。

《慈雲尊者が虫の所作に托して人間の愚かさを詠まれた「蚊行詩」のなかに、「何ぞ弁ぜん春と秋とを、寧ろ識らんや父と母とを」という句があります。そして、この詩の注解（尊者の弟子の作）に、

花開いて春を知り、葉落ちて秋を知る分齊は人間通途の智慧、虫類と小異あり。虫は此に異なり。莊子に螻蛄は春秋を知らずと云ふ如く、春と秋とも分ちなきなり。人間の過去の業に依つて現在の報あることを知らず、現在の業又未来の生となることを知らざる、虫の春秋を知らざるが如し。寧ろ父と母とを識らんやとは、虫の業報因縁、父母あることを知らず。人間の、仏神ありと信ずるやうなれども、実々に仏はいかなることとも、神はいかなる体にてましますと云ふことも知らぬ、皆此の類なり。

とあります。人間たるものは先哲の教をよく聞き、禽獣虫類に類するよくな愚かさから脱却して、心の靈性を十分に開き顕わさねばならぬことです。》

・路遠くして馬の力を知り、交久しくして人の心を見る。

・君子は一心を以て多事を御し、小人は多事を以て一心を役す。

・一心を以て万友に交はるべし。二心を以て一友に交はるべからず。

《道元禪師は、「一切に物を逐うて心を変ずること莫れ。物を逐うて心を変じ、人に順つて詞を改むるは、是れ道人に非ざるなり。」と「典座教訓」のなかに述べておられます。応事接物や人との交りに「一心」を貫くには修養が要るわけです。「行住坐臥、常爾一心」と仏教の律文にあります。心身一如、知行合一的工夫を積んでゆかねばならぬことです。》

・人老いて心老いず、家窮して行窮せず。

・富は屋を潤し、徳は身を潤す。（大学）

・小人窮すれば斯に濫る。（論語）

・純金は火を恐れず。

・歳寒くして松柏の彫むに後るゝを知る。（論語）

・士窮して節義顯はれ、世乱れて忠臣を見る。（集註謝氏の言葉）

・一樹の葉に甘酸あり、一母の子に賢愚あり。

・天をも怨みず、人をも尤めず。（論語）

・死生命あり、富貴天に在り。（同）

・国清くして才子貴く、家富みて小兒驕る。

・名香は火に入つて芬郁を発し、善人は難に臨んで盛徳を顯はす。

・昼間に人に対して悪を為さざれば、夜半門を敲くの音に心驚かず。

・水に近くして魚の性を知り、山に近くして鳥の声を知る。

・誠は愛を生じ、愛は知を生ず。

・飽くまで食らひ煖かに衣て教なければ禽獣に近し。

続いて「楠」に記載の『「十善法語」 拜読記 宿南八重』より抄出。

昭和四十四年五月十四日 曇

青葉木兎あおばみ、うすくの庭先と山裾とからよび交わす声を聞いて起床。四時。洗面後門先を漫步。水量豊かな池の面に睡蓮の浮葉、濃紫に咲き始めた杜若。向いの進美・須留岐の山には薄靄がかかって神秘的にして静寂。四時二十分、谷の鴉の啼を離れる声につれて居間にもどって端坐して「人と成る道」略語を拝誦す。和綴じの「十善法語」の巻頭に載せられている尊者直筆を版におこしたもの、その高雅な筆跡に魅せられるようになった。深い文章も本文を読みゆくにつれて徐々に会得し得ることを期待しつつ、この略語を毎朝拝誦する。実に名文なりと感じ入る。

師曰、人の人たる道は此十善に在じや。人たる道を全くして、賢聖の地位にも達すべく、高く仏果をも期すべきと云ふことじや。経の中に此道を失へば鳥獸にも異らずと有じや。

身三口四意四の理に順ずるを十善業と云。理に背くを十不善業と云。理に順ずると云は別のことではない。唯この私意じや。私意を以て本性を増減するが謂ゆる悪じや。此私意ある身口意業を十悪と云。仏性は善悪共に妨げぬものなれども、善は常に仏性に順ずる。悪は常に仏性に背くじや。

五月十六日 曇

四時二十分起床。灰色の空。上の谷から青葉木兎が啼く、夢の名残かとも思われる。今朝は鶯が鴉と鶯に先がけて啼く。慈雲尊者が十数年を過され

た生駒山中の雙龍庵、二十八年を過された葛城山中の高貴寺の曉に聞きまじしも、かかる鳥の声々であつたか。

通途つうずの者は我手に取らず我眼に見ねば、我所領とも云れぬ様に思ふべけれども、我手に取るものばかりが我物と云ことではない。千金の家翁も常に千金を懐にし居はせぬ。家僮などにまかせおきて千金の主じや。

此諭にて知れ、真修行の人は梵天に上つて見ねども、十八梵天には静慮の樂を得させ置て我有じや、我子じや。無色界は見ずとも、又自身無色定を得ずとも、彼衆生に深禪定に入らせておきて我有じや。勇者は勇者、智者は智者、たとひ我腕力智慧は彼に及ばずとも、みな我有じや、我子じや。面白きじや。富貴の者は富貴ながら我有じや、我子じや。貧賤なる者は貧賤ながら我有じや、我子じや。面白きことじや。

五官を超えたものの実在を信じぬことを科学的な常識として馴らされて来たけれども、八十に近い齢を重ねた今日、それに安住しきれぬものがある。神秘的な宗教の世界として受けとつて来たが、尊者は五官に即して五官の根底に真理の実在することを教えて下さる。

五月十九日 晴れ

四時三十分起床。昨夜の大雷雨おさまり、薄靄を残して東天明るし。鶯の笛の声冴えて谷間の山鳩と呼応す。七時、法語を読み終つて座を起つとき、すでに朝日は築山に射して楠の葉の黄緑すがすがし。軒端の柿若葉と共に日毎にその緑の色の変わりゆく様をみるも面白し。二本ならぶ楠の新緑の雄々しき、この木陰に生れ、ここに老の日を迎う。また一年の齡の許さるべきや。

「万葉の草・木・花」 小清水卓二著より一部抄出。

さくらの表情

いろいろの動物にいろいろの表情があるのと同時に、植物にもその種類に応じていろいろの表情がある。

植物の中でも、桜は特に目立った表情の持主である。……

いま仮りに普通よく見られる桜を系統的に大別すると、染井吉野系、彼岸桜系、山桜系、里桜系となるが、この四つの系統にも非常に著しい表情のちがいがある。この表情のちがいは、われわれ観桜者の心や気分の主観的にも客観的にも知らず識らずの間に乗りうつっている。例えば花時に新興の公園や、盛り場にとく植え込まれていて線香花火のように一時にパツと咲く染井吉野という桜の種類の下に行くと、何とはなしに身も心も浮き立てられてドンチャン騒ぎや無礼講があえてしてみたくなるのが人情らしく、事実このような情景は殆んどこの種類の桜花の下で期せずして行われているのを見てもわかる。

この種類の桜は、気品が少く、散り果ての姿がいかにみにくいものである。しかし早春に多数の花が葉に先んじて一時に咲き、しかもどのような地勢に植えられても、またどのような場所に植えられても全く無頓着で、その表情に変わりがない。つまり背景的環境を必要としない、また背景の様子を選まない極めて庶民的な桜である。従つて、この種類の桜を対象とした名画や詩歌は、この桜の来歴の新しいせいも伴つて殆んどない。なおこの桜の原生地は、吉野には無関係で済州島が本家であることもわかった。背景を必要としたり、背景の種類によつてその桜の表情の美しさを倍加する桜の一つとしては、彼岸桜がある。同じ彼岸桜という仲間でも、特に

枝垂彼岸桜しだれひがんざくは、格別その背景の種類を選ぶ。この桜の背景として最もふさわしいのは伽藍である。背景なしの枝垂彼岸桜は何となくたよりがなく、目立ちのしない淋しい表情に終つているが、その付近に伽藍が配せられると格別の優雅さを現わすと同時に歴史的懐旧の情をそそりたてる。

京都の平安神宮の境内にある紅八重咲枝垂彼岸桜が、えもいわれず内外の人々に等しく印象的であるのは、平安神宮の丹塗の美しい建物とよく適応しているからである。彼岸桜の類は、まさに日本の人工美術特に古美術と共に生きている感がある。

次に桜の中で、日本の精を包含した花として謳歌されるものは、山桜系である。この桜の類は何れも、花と葉が同時に開くいかにも清浄なすがすがしいもので、多種多様の変種があるが、みなその背景を必要とし、しかもその背景は人工的な物体でなく、どこまでも大自然そのもの、例えば常緑樹や、山川溪谷等の自然的背景が配されてこそ、真のよさや、真の表情があらわれるものである。あたかもお能と能舞台の關係のようなもので、能舞台の環境ぬきのお能では折角のお能も台なしであるのと等しい。吉野山や嵐山の桜が、古今を通じて桜の王座を保ち得ているのは、全くこれらの地帯の背景に依存しているといつても過言でない。

山桜系には、非常に種類が多いが、これを大別すると、白山桜と紅山桜と毛山桜（オク山桜）とがある。この三種類はそれぞれ形態や、花期や、自然分布地域等を異にしている。……昔からよく詩歌に詠ぜられたり絵画の対象になったものはこの種類の桜である。……本居宣長の詠じた敷島の大和心を人とはば朝日にほふ山桜花の桜は、白山桜を詠じたものである。